第六講・文学的文章④

一題目　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

次の日も、マコトに話しかけることはできなかった。マコトのほうも、わざわざぼくに声をかけたり、こっちを見たりしなかった。友だちといつもどおりにおしゃべりして、いつもどおりに笑って、いたずらをする＊1ジャンボやタッチにいつもどおり輪ゴムをぶつけて……。

みんな知らないんだ、なにも。マコトはまだ、転校のことをぼく以外の誰（だれ）にも話していない。

最初は、ほんのちょっとだけ、それがうれしかった。①ヒミツを知っているのはぼくだけだ、なんて。

でも、いまは違（ちが）う。マコトがクラスでぼくにだけ転校の話を打ち明けたってことは、ほかの友だちより早く「バイバイ」を言いたかったってわけで、それって、誰よりも先にぼくとお別れしたいってことでもあって……つまり、マコトはぼくのことなんて大嫌（だいきら）いで……だからさっさと「バイバイ」しちゃって、ほかの友だちとは一日でも長く友だちでいたいから、まだなにも打ち明けてないのかもしれない。

胸（むね）がドキドキする。緊張（きんちょう）するドキドキよりも、もっと痛い。ズキズキ、だ。

②べつにいいけど。そんなの、べつにいいけど。ぼくだってマコトのこと、なんとも思ってないし。あいつ乱暴だし、そっけないし。そうだよ、＊2転校したての頃（ころ）はもっと無愛想で、「友だちなんていらない」みたいな態度だったのに、なんだよあいつ、みんなと笑っちゃって、楽しそうで、＊3チョンマゲをさわらせたりして……。

昼休みが終わって教室に入るとき、外に出ようとしたマコトとドアの前でぶつかりそうになった。

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

もちろん――ぼくは、無視（むし）。そっぽを向いてマコトの横をすり抜（ぬ）けようとしたら、③「ちょっと」と呼び止められた。しかたなく立ち止まって、しかたなく振（ふ）り向いて、しかたなく「なんだよ」と言った。

「ツヨシ、このまえからなに怒（おこ）ってんの？」

④頬（ほお）がカッと熱くなった。あわてて目をそらして、「べつにぃ」と言った。

「怒ってるじゃない、やっぱり」

「怒ってないよ」

「怒ってるっ」

「怒ってないっ……そんなこと言うんだったら、マコトだって……」

「わたしがどうかした？」

「……どうもしてないけど」

そうなんだ。マコトはずーっと、いつものマコトで、クラスのみんなもずーっと、いつものみんなで、⑤ぼくだけ、ぼく一人だけ、面白（おもしろ）くなくて、つまらなくて、イライラして、機嫌（きげん）が悪くて……悲しくて、寂（さび）しくて……。

目をそらしたままなにも言えなくなったぼくに、マコトは、ヒューウッとくちぶえを鳴らした。「ま、いいけどね」と軽く笑って、歩きだして、それっきりだった。

（重松清（しげまつきよし）『くちぶえ番長』）

＊１ジャンボやタッチ＝「ぼく（ツヨシ）」やマコトと同じクラスの男の子。

＊２転校したての頃＝マコトは、四年生の四月に「ぼく」が通う小学校に転校してきた。

＊３チョンマゲ＝マコトは、かみの毛を頭のてっぺんでチョンマゲのように結んでいる。

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問一　――線①「ヒミツを知っているのはぼくだけだ」とありますが、転校することをマコトから聞いたときの「ぼく」の気持ちとして最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア　「ぼく」は口がかたいから、クラスのみんなに信らいされているのだと、いばりたい気持ち

イ　マコトは「ぼく」のことをいちばん大切な友だちだと思っているのだと、得意に思う気持ち

ウ　マコトが転校することをクラスの友だちに早く教えてあげたいと、そわそわする気持ち

エ　乱暴なマコトが転校すれば、このクラスは静かになるはずだと、ほっとした気持ち

□

問二　――線②「べつにいいけど。そんなの、べつにいいけど。ぼくだってマコトのこと、なんとも思ってないし」からは、どんなことがわかりますか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア　「ぼく」がマコトのことを本当は嫌いだということ

イ　「ぼく」がマコトの勝手な行動を許せないでいること

ウ　「ぼく」がマコトに対して興味がなくなったこと

エ　「ぼく」がマコトに対して意地を張っていること

□

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問三　――線③「『ちょっと』と呼び止められた」とありますが、このときの「ぼく」の気持ちとして最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア　マコトに話しかけられたことが、内心うれしかった。

イ　マコトとは話をしないと決めていたので、どうでもよかった。

ウ　無視しようとしたのに呼び止められたので、ふゆかいだった。

エ　「ちょっと」という呼び止め方に腹（はら）が立った。

□

問四　――線④「頬がカッと熱くなった」とありますが、このとき、「ぼく」の「頬がカッと熱くなった」のはなぜですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア　マコトが「ぼく」のことを気にしていたことがわかって、照れくさかったから。

イ　ぶつかりそうになったのにもかかわらず、あやまらなかったマコトの失礼な態度に腹が立ったから。

ウ　怒っていることをマコトに気づかれていたことが、はずかしかったから。

エ　「ぼく」が怒っている理由をマコトがわかっていないことを知って、あきれたから。

□

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問五　――線⑤「ぼくだけ、ぼく一人だけ、面白くなくて……悲しくて、寂しくて」とありますが、「ぼく」がこんな気持ちになったのはなぜですか。次の［　］にあてはまることばを文中から十五字で書きぬきなさい。

　マコトがクラスで「ぼく」にだけ転校の話を打ち明けてくれたことが、逆に「ぼく」を不安にさせ、［　］なのではないかと思うようになっていたから。

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

二題目　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

①その日、ママは日が暮れても帰ってこなかった。

ぼくは宿題を終えると庭に出た。テレビもマンガも、つまらない。なにをやってもつまらない。ワンの小屋の前にしゃがみこんで、ヒュウッ、ヒュウッ、とくちぶえを吹いた。そうでなくてもくちぶえはヘタなのに、特に調子が悪い。すぐにかすれて、しぼんでしまう。

だめだよ、ツヨシ、もっと勢いよく吹かないと——。

マコトの声がよみがえる。

ワンワンワンワンッ、とワンも思い出の中で励ますように吠えた。

パパが会社から帰ってきた。家の中に戻ろうかと思ったけど、なんだかそれも面倒くさくて、しゃがんだままでいたら、②パパは*ガレージから直接庭に回って、「やっぱり、ここにいたのか」と笑った。

「ママ、まだ帰ってこないんだよね……なにやってんだろう」

「いろいろ忙しいんだよ、今日は」

パパはやっぱり、ママの外出の理由を知ってるんだ。

それを訊く前に、パパはぼくと並んでワンの小屋の前にしゃがみこんで、③「ワンが死んでいちばん悲しかったのはママなんだよ」と言った。

「パパやツヨシはときどき散歩に連れて行くだけだったけど、ママはずーっと、ワンが子犬だった頃からおじいちゃんになるまで、いちばんそばにいたんだもんな」

「でも……犬小屋、もういらないって」

「うん、言ってたなあ」

「ほんとうにワンのことが好きだったら、そんなこと言わないんじゃないの？　犬小屋がなくなったら、ワンのことも思いだせなくなっちゃうじゃない」

パパはうなずきながら笑って、「でもな」と言った。

「犬小屋がどんどん汚れて、ボロボロになっていくのを見るのって、つらいだろ」

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

「それは、まあ……そうだけど……」

「たとえ犬小屋がなくなっても、ワンのことはいつでも思いだせるんだ。ママも、パパも、ツヨシも」

だってそうだろう、とパパは人差し指で犬小屋を指して、それからその指を自分の胸にぴたっと当てた。

「思い出っていうのは、ここにあるんだ。犬小屋がなくなっても、この家からいつか引っ越しちゃっても、ワンはずっと、みんなのここにいるんだよ」

ツン、ツン、ツン、と人差し指で自分の胸をつついて、「ママは④それをツヨシに教えたかったんじゃないのかな」と笑う。

そして、もっとにっこり笑って、もう一言――。

「ワンのことだけじゃなくて、さ」

思わず「え？」と聞き返したぼくに、パパはつづけて言った。

「パパは*2ヒロカズにはもう会えないけど、あいつは、ずーっと、ここにいるんだ。パパの胸の中で、わんぱくな子どもの頃のまま、笑ってる」

「うん……」

「マコトくんだって同じだよ。ここにいるんだ、これからも、ずーっと」

パパに胸を軽くつつかれて、⑤たまらなく恥ずかしくなって、ダッシュで家の中に戻ったとき、ママが帰ってきた。

（重松清『くちぶえ番長』）

*1ガレージ＝車をしまっておくところ。車庫。

*2ヒロカズ＝マコトの父親。「ぼく（ツヨシ）」の父親の小学校時代の親友。すでに病気で亡くなっている。

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問一　――線①「その日、ママは日が暮れても帰ってこなかった」とありますが、家で一人で過ごしていた「ぼく」の気持ちを表していることばを文中から五字で書きぬきなさい。

問二　「ぼく」がマコトのことばやワンの行動を空想しているひと続きの三文を文中からさがし、その初めと終わりの四字を書きぬきなさい。

～

問三　――線②「パパはガレージから直接庭に回って」とありますが、パパがこうしたのは、なぜだと考えられますか。次の□にあてはまることばを文中から七字で書きぬきなさい。

最近元気がなくさびしそうなので、ツヨシは□にいるのではないかと思ったから。

問四　――線③「ワンが死んでいちばん悲しかったのはママなんだよ」とありますが、パパがこのような話を「ぼく」にしたのは、どのような気持ちからですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア　元気のない「ぼく」にいらいらする気持ち
イ　元気のない「ぼく」をしかりたい気持ち
ウ　元気のない「ぼく」を励ましたい気持ち
エ　元気のない「ぼく」をからかう気持ち

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問五　――線④「それ」が指しているのはどんなことですか。次の□にあてはまることばを、aは三字、bは十五字で文中から書きぬきなさい。

思い出は、ずっと［a］にあるので、犬小屋がなくなったとしても、［b］のだということ

a □□□

b □□□□□□□□□□□□□□□

問六　――線⑤「たまらなく恥ずかしくなって、ダッシュで家の中に戻った」とありますが、このとき、「ぼく」が恥ずかしくなった理由として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア　ワンやマコトのことで、ずっと落ちこんでいる自分が情けなかったから。

イ　「ぼく」の胸の中に、マコトはずっといるんだと言われて、うれしかったから。

ウ　「ぼく」がマコトを好きなことを、パパに気づかれているとわかったから。

エ　パパのことばや動作が、しばいがかっていて、照れくさかったから。

□

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第六講　文学的文章④

一題目

問一　イ
問二　エ
問三　ア
問四　ウ
問五　マコトはぼくのことなんて大嫌い

二題目

問一　つまらない
問二　だめだよ　～　吠えた。
問三　ワンの小屋の前
問四　ウ
問五　a　胸の中
　　　b　ワンのことはいつでも思いだせる
問六　ウ

Ⓒ RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。